

蓬 左

HÔSA

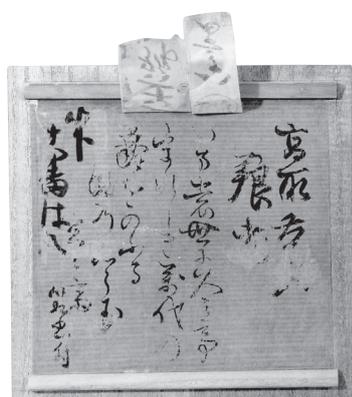


原城陣図 江戸時代写 189.5×187cm

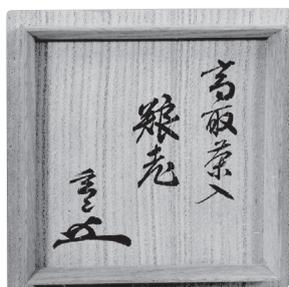
目利きと鑑定

財産でもある美術品の多くには、価値を保証する鑑定書が附属しています。大名道具に含まれる品々にも、必要に応じて作られたさまざまな形式の鑑定書が添えられています。大別すると、重要な儀礼の一つであった贈答に際して調えられたもの、作者や産地を特定したもの、茶人が自らの感性で選んだ品にその旨を書き付けたものなどがあります。

こうした鑑定は、刀剣については本阿弥家、目貫・弁・小刀柄などの装剣具は後藤家が独占して行っています。これらの鑑定書には作者名や寸法・彫物などのほか金銭的な価値を記載する特徴があります。奉書紙を中央で横



高取茶入 銘 養老 (徳川美術館蔵)



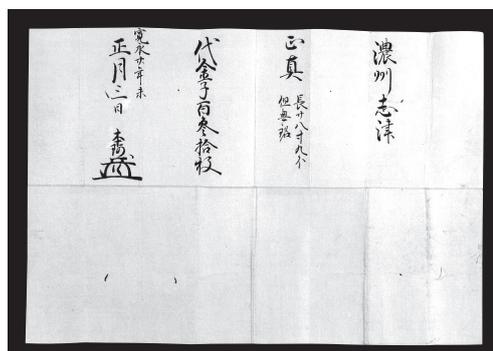
尾張徳川家十二代齊莊が道具整理を行い、裏千家十一世玄々斎宗室に鑑定させて、従来「漢物 大肩衝」として中国製と認識されてきた茶入を日本製の高取焼と極めました。箱も新たに作り、書き付けを宗室が行いました。

に折って文言を認めますので折紙と称されま
す。価値ある物を「折紙付」と称する由縁です。
絵画は狩野家や住吉家、書跡は古筆家の鑑定
が良く知られています。茶器は収納する箱に
鑑定結果を書き付ける場合があります。
尾張徳川家の伝世品から、江戸時代の鑑定
書の種類や性格、鑑定にあたった人々につい
て紹介します。



短刀 金象嵌銘 貞宗スリ上
本阿 (花押)
鎌倉 - 南北朝時代 14 世紀
(徳川美術館蔵)

茎の表裏に「貞宗スリ上」「本阿(花押)」と金象嵌された銘があります。本阿弥光徳が貞宗と極めたことが知られます。



折紙 短刀 名物 戸川志津 (徳川美術館蔵)

寛永 20 年 (1643) に本阿弥光温が発行した折紙です。正宗十哲の一人、美濃国の刀工・志津三郎兼氏の作と極め、代金は大判 130 枚 (小判 1,300 両) としています。

江戸の歴史書 — 尾張藩社会と秀吉 —

旅行誌に歴史が溢れているように、今日、私たちが歴史に関する記述を目にすることは案外と多いものです。そして、私たちは、学校で習った〈歴史〉だけではなく、様々な媒体を通じて日本の〈歴史〉をイメージします。

〈歴史〉が多くの人々によって意識されるようになる端緒は江戸時代から求められます。幕府や藩によって江戸前期から歴史を記録する施策がなされていきました。出版の盛況によって人々が書物に触れる機会も増えました。特に一八世紀以降には社会の多様な階層が〈歴史〉への関心を深めていったのです。

本展では、〈歴史〉書を紹介しながら、また、〈歴史〉の創られ方についても考えていきます。

豊臣政権を超越することで成立した徳川の時代に、豊臣秀吉はどのように認識されていたのでしょうか。秀吉誕生の地である尾張では、秀吉観に特異性はみられるのでしょうか。

「御年譜」や「張州雑志」、「尾張名所図会」といった尾張地域の〈歴史〉書、幕府によって編纂された「本朝通鑑」、戦国末期を生きた大久保忠教の記録「三河物語」など、様々な〈歴史〉書にみられる秀吉評を比較しながら紹介します。

武とん天下とほむ此規範あり其草創の五君
 尊氏公 信長と 秀吉公 神君ありしうらね
 那古野 秀吉公ハ中村の出生日本歴一と
 君尾張一國より出治へハ海にも國の眉目い
 小ましく 國家鎮護のりかゝる武好と生長

尾張名所図会 前編 巻4
 天保15年(1844)刊

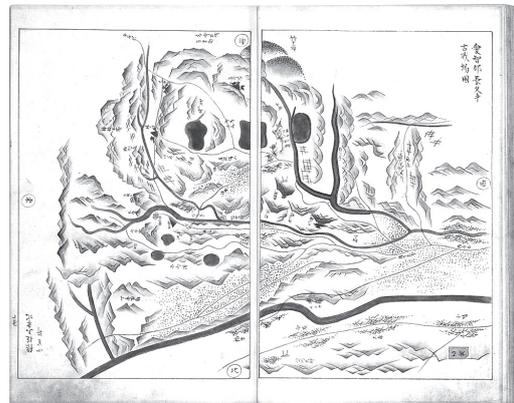
天下草創の五君(源頼朝、足利尊氏、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康)のうち、三人(頼朝、信長、秀吉)が尾張国に出自をもつとして、「当国の眉目」とされています。



絵本豊臣勲功記
 安政4年(1857)～明治17年(1884)刊



張州雑志 巻83 内藤東甫編 江戸時代中期 写



張州府志 松平君山等編 江戸時代中期 写

妙興寺(現一宮市)の宝物の一つとして紹介されている「太閤画像」です。同画像は現在も妙興寺に伝わっています。

秀吉と家康が争った長久手合戦の古戦場では、江戸時代中期から史跡調査が行われていました。

展示室 1・2 徳川美術館（徳川美術館では 10 月 10 日(土)より開催）

秋季特別展

戦国ふあつしよん——武将の美学——

戦国時代には、天下取りをめざして、壮絶な戦いを繰りひろげた多くの武将たちがいました。敗北は死を意味する、極限の状態を生き抜いてきた武将たちの力強い生きざまは、現代の私たちを魅了し続けています。

武将たちは、戦国時代におけるファッション・リーダーでもありました。現在に伝えられている、彼らが身に着けた当世具足や変わり兜・陣羽織などは、彼らの自由闊達で豪胆な気風を反映し、大胆な色目や奇抜なデザインが採り入れられました。また、この時代に東南アジアを通じて日本にもたらされた西洋の文物は、新し物好きの武将によって採り入れられ、人々の風俗にも大きな影響を与えました。これら戦国時代に華麗な展開を見せた武将の服飾は、江戸時代の各大家において先祖の武功のあかしとして重要視され、大事に受け継がれました。武将の姿は肖像画や風俗画に描かれ、武家社会における服飾のありようを今に伝えていきます。

本展では、武将のファッションを中心とする、戦国時代に華開いた多彩なデザインを紹介します。

このたびの展覧会では、全国の社寺や個人の御所蔵家、公私の諸機関より貴重な作品を拝借することが出来ました。どうぞご期待下さい。



重要文化財 ちょうじもんつじが はなぞめどうふく 丁子文辻ヶ花染胴服
徳川家康より安原伝兵衛拝領（島根・清水寺蔵）

徳川家康が慶長 8 年（1603）に、石見銀山の鉾山師・安原伝兵衛に下賜した胴服。山形に区画した地色を紅と黄の二色に染め分け、大柄な丁子文様と小柄な丸文・亀甲文を段変わりに配した、大らかで華やかな意匠を示しています。展示期間：10/10(土)～25(日)



重要文化財 こんべいらしゃじそでがわりじんばおり 紺・紅羅紗地袖替陣羽織
上杉謙信所用（山形・上杉神社蔵）

上杉謙信着用の陣羽織。南蛮貿易で日本にもたらされた、貴重な羅紗が用いられています。袖の緋色と身頃の紺色の対比が美しく鮮やかです。雨風をしのぐ役割と見た目の美しさを兼ね備えた一領です。展示期間：10/10(土)～25(日)



重要文化財 織田信長像
狩野元秀筆（豊田・長興寺蔵）

天正10年(1582)に本能寺で自刃した織田信長の一周忌にあたり、家臣の余語正勝が描かせた信長の肖像画。萌黄地の肩衣と長袴の下には白綾の小袖を着重ねています。教科書や書籍で紹介される最も有名な肖像画です。

展示期間：10/31(土)～11/6(金)

重要文化財 ぎんい よごねしろいとおじどうまるぐそく 銀伊予札白糸威胴丸具足
豊臣秀吉より伊達政宗拝領（仙台市博物館蔵）

天正18年(1590)、豊臣秀吉が小田原合戦ののち宇都宮で伊達政宗の出迎えを受けた際、政宗に下賜した甲冑。熊毛を植えた兜の前後に軍配二枚を立てた奇抜な姿が目をひく、秀吉好みの華やかな甲冑です。



写真：田中親美模写「源氏物語絵巻」（昭和10年）
古筆研究家としても知られた田中親美(1875～1975)氏によって製作された、尾張徳川家伝来の国宝「源氏物語絵巻」の模写。料紙の大きさや装飾、継目まで原本と同様に作り、書風も忠実に写されています。田中親美氏は、この「源氏物語絵巻」のほか、「平家納経」や「本願寺本三十六人家集」などの模写も手がけました。

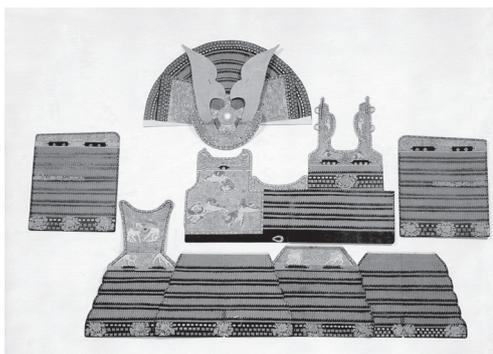
源氏物語の世界

徳川美術館での、国宝「源氏物語絵巻」特別公開にあわせて、11月18日～12月13日の期間には、「平成復元模写」を含む、各時代に製作された模写の数々を特集展示します。（国宝「源氏物語絵巻」は、11月21日～29日に徳川美術館常設展示室にて公開。）

平成22年1月5日(火)～2月14日(日)

展示室1

江戸の好古趣味



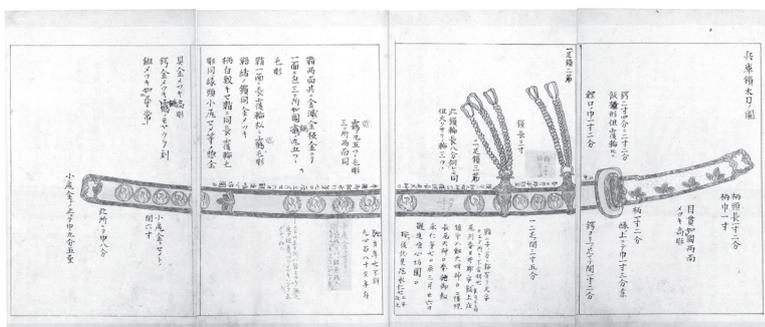
こうふくじしよざうよしつねよろいひながた
興福寺所蔵義経鎧雛形

当時、興福寺に所蔵された源義経所用と伝えられる甲冑(焼失)の雛形。幕府御用絵師の板谷慶舟広当が所蔵した図から写しました。

時代を経た「古きもの」に言いようのない愛情を感じ、集め楽しむ人々は、いつの世にもいます。なかでも江戸時代の中・後期は、「好古家」と呼ばれる人々が数多く現れた注目すべき時代でした。その蒐集対象は広く、書画や典籍、美術工芸品だけでなく、石や瓦のかけらにもおよび、鑑賞会を開いて情報交換をし、さらにその成果は書籍として出版されました。また、復古的な関心の高まりから「古」に理想をもとめ、「古きもの」を模写・模倣して当時の文物に取り入れようとする試みも積極的に行われました。

ありとあらゆる古い文字を集めた藤貞幹

(一七三二～一七九七)、全国の古書画・古器物を調査させ『集古十種』を編纂した松平定信(一七五八～一八二九)、そしてこの尾張の地にも尾張徳川家九代宗睦をはじめ、さまざまな好古趣味をもつた人々の足跡が残されています。「古きもの」に魅了された人々と、彼らが遺した偉大なる業績の数々を紹介します。



張州雑誌 巻41 内藤東甫編

尾張藩士内藤東甫が尾張徳川家九代宗睦の内命により編纂した尾張地誌で、藩内の社寺の宝物、名所旧蹟、産物などを写し留めています。図は熱田神宮に伝わった鎌倉時代の「金銅鶴丸文散兵庫鎖太刀拵」。

展示室2

島原の乱

—その攻略と陣形—

寛永一四年(一六三七)から同一五年にかけて、島原半島の一角でおこったキリシタン信者や住民たちの一揆が島原の乱です。一揆では、原城に籠城した人々、幕府側でも上使板倉重昌が戦死するなど、多くの死者や負傷者を出しています。

この天草地方で起きた一揆軍と幕府軍の戦いを伝える絵図が描かれています。絵図からは、多くの犠牲者を出した戦いの様子の一端が窺えます。表紙とP.8をご覧ください。

平成22年2月17日(水)～4月4日(日)

展示室1

尾張徳川家の宝物目録

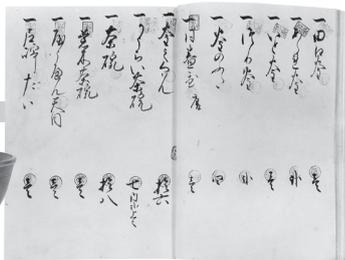
—蔵帳にしるされた品々—

尾張徳川家では、藩祖の義直以来、歴代の藩主やその夫人・家族が用いた品々を厳格に管理保存してきました。その甲斐あって、現在の徳川美術館・蓬左文庫の展示で保存状態の良好な品々を見ることが出来ます。その管理収蔵に重

要な役割を果たしたのが「蔵帳」^{くらちやう}「書籍目録」です。それには家康の遺産として藩祖義直に譲られた諸道具と書籍の目録「駿府御分物御道具帳」^{くらちやう}「駿河御讓本目録」を始め、藩主の代替わりに作成された道具目録や書籍目録などがあります。それら蔵帳には、由緒や伝来などが明確にしるされています。尾張徳川家で大事に保存され伝えられてきたかを知る事が出来ます。

今回は、家康所持品や歴代藩主やその夫人たちが所持した品々や書籍類を、蔵帳にしるされた記事とともに展示します。

すんぶ おわけもの おどうぐらう
駿府御分物御道具帳
(徳川美術館蔵)



ようへんでんもく
曜変天目
(徳川美術館蔵)



ごしせきもくろく
御書籍目録



ふほくわかしやう
夫木和歌抄

展示室 2

幕末情報学

「青窓紀聞」にみる長州征伐



せいそうきぶん
青窓紀聞 第138冊

幕府軍の遠征は、広島に本陣を据え、長門・周防両国に対して五方面から展開される予定でした(陸路安芸国より岩国へ・陸路石見国より萩へ・海路四国方面より徳山へ・海路九州方面より下関へ・海路九州方面より萩へ)。それぞれの方面をうけもった大名と家紋が地図上に配されています。



青窓紀聞 第144冊

遠征に従軍した正信は、道中で城下・港湾・名所をスケッチしています。室津から広島までは船旅であったことから、船上からの景色も描かれています。

激動の幕末政治史において、幕府による長州征伐は転換点の一つにあげられます。前尾張藩主徳川慶勝を総督として行われた第一次征長(一八六四年)は、長州藩が家老三名の首級を差出す等の処分で、戦火を交えることなく終結します。軍事力が温存された長州藩は、高杉晋作らによって内部改革を推し進め、第二次征長(一八六六年)では、幕府は成果をあげることができませんでした。そして、その後の討幕へとつながっていくのです。

慶勝の第一次長州征伐は果たしてどのような

遠征だったのでしょうか。本展では、尾張藩藩臣水野正信の記録から、その一端を垣間見ていきます。正信は大道寺家の用人です。同家は藩の要職にあつたため、藩政や幕政に関する重要な情報もたらされました。また、正信は個人的な交友関係からも多くの情報を入手し、それらをひたすらに筆記して「青窓紀聞」として残しました。「青窓紀聞」を通じて、八月十八日の政変(一八六三年)前後の緊迫した政情や慶勝に率いられた幕府軍遠征の様子を紹介します。

合戦図をさぐる

表紙の「原城陣図」全体は、島原の乱の最後の戦いの様子を描いたと思われる。一揆軍が原城に籠城して、乱が終結するまでの時間経過を無視して、各所で起こった夜討ちや、元旦の戦鬪で上使の板倉重昌が戦死した場所も記録しています。二月末の最後の戦いで城内に幕府軍が突入した各通路や、崖を登るなど一番乗りした先陣武将の名も記載しています。

原城の近くには、各藩に割り振られた前線基地が描かれ、竹矢来で囲み、城内を偵察するための井楼(せいろう)が建てられ、周囲には鉄砲弾避けのために竹楯を立て掛けています。細川家が築いた山の近くに城内へ金掘場(かなほりば)を掘るための場所も設けています。原城内の本丸には、増田(天草)四郎時貞の陣所を描いています。一揆軍は村毎に集まって籠城していたらしく、城内各所に村名が見えます。海側の城外の民家が炎に包まれています。他方、幕府軍に参加した大名達の陣所は、竹矢来で囲み藩旗を立て大名の名前も記しています。海にはオランダの旗をなびかせた艦船や、奉書船、細川・黒田各藩の番船が城を囲んでいます。乱の図は何種類か製作されていますが、その多くは江戸時代中期以降に盛んになった軍学の教材として、数多く模写され伝えられました。

「原城陣図」と「肥前島原合戦図」を比べてください。前者からは、乱の経過が詳しく読みとれます。乱末期の様子を描いたと推定される後者には、動員された大名、配下の負傷者、死者の数等が詳しく記されています。



肥前島原合戦図 江戸時代写 82.8 × 104.2cm

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> / <蔵書検索もできます。>

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【市バス】名古屋駅バスターミナル(テルミナ2F)グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター(メルサ3F)4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分 桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅バスターミナル(テルミナ2F)発着で平日1時間に1本、土・日・休日は30分に1本運行

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分 120円)をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日のときは直後の平日)

12月14日(月)～1月4日(月)特別整理、年末年始休館 但し12月26日(土)・27日(日)エントランス・閲覧室開室

■展示室/有料 一般:1200円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料・館外貸し出しはいたしません。

【開架図書】午前9時30分～午前12時 12時45分～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

